

第8号

定価一年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む



発行 檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1
Tel 0139(52)0858 FAX (52)1490
発行責任者 石橋 英敏
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

「戦争法制反対」言い続けます

9条を守り「子どもと若者を戦場に送らない」9・9行動

70人が集会・行進

9月9日、江差町で行われた戦争法反対の行動には70人が参加しました。集会では、8月30日の国会前行動に参加した中山



江差町にしえ街道を行進する参加者

員の高橋和子さんや菅野志津子さんらも発言、声を上げました。江差町の国道といにしえ街道を行進し、「子どもと若者のいのちを守るう」と訴えました。

晴生さん（上ノ国小）が、全国行動の様子を伝えました（別項）。また、リレートークでは、せたな町から駆けつけた浜口喜久雄さんや横田聡さんが発言。浜口さんは、辺野古基地反対の座り込み体験を報告、横田さんは、いてもたってもいられない思いを語りました（別項）。他にも元教

いてもたってもいられなくて

何かしなくばあじもどく思ってた



せたな町横田聡さん

かつて「教え子を戦場に送るな」の標語に「この平和なときに」と違和感を覚えたものだが、今、その言葉が現実味を帯びて迫ってくる。「まさかこうなるとは」

と危機感がいっぱい。このままではいけない、何かしなくばあじもどく思ってた。自分力は小さいかもしれないが、やはり黙っていることはできない。

ここから始まる

「国会前集会に参加して」中山晴生さん



身動きとれない状態、国会前3万と言われるが、国会を囲むようにその数倍はいた。若い人たちの本気が伝わってくる行動、シルズの寺田ともかさんのスピーチが印象的だった。彼女の言葉を紹介したい。「安倍首相、殺戮を拒む人間の声が聞こえますか」と発した寺田さんは、イラク・フアルージャでの無差別殺人を問われた首相が「断定できない」と答弁したことを引き、「私が代わって答えます。無差別殺人は戦争犯罪です。殺人に関与していくことになるのではと、いてもたってもいられない。私には命を奪う権利も奪うことを許す権限もない。法案を許すことは責任をとれないこと許すこと。それだけは絶対にできません。私はこの国の主権者であり、この国の進む道に責任を負っている人間の一人だから」と。別の若者の発言、「法案が強行されたとしても、たたかいはそこから始まる」も私たちが勇気づけてくれる。事はいのちと民主主義を守るたたかいたい、息長く不断の努力を続けていきたい。



そほ降る雨のなか、発言を聞く参加者
江差町東本願寺前広場(9月9日)

戦争法案反対決起集会での発言

子どもも大人も共に考えるべき



発言する参加者

戦争法案反対決起集会での発言、その続きを紹介いたします。法案成立が強行されていますが、黙って屈してはいけません。いろいろな思いを込めて。

子どもも大人も共に考える『平和』を

子どもはその時その時を生きている、その日常が『平和』だと思おう。『平和』という漢字を学習した時、子どもから『『平和』って何?』と聞かれた。一緒に考え、「幸せってことかな...?」などのやりとりになる。こういう日常が



発言する参加者

あるのも平和だから。「相手を傷つけず、自分も傷つけない方法を知るためにはきちんとした知識を持っていなければならぬ」と夫は言う。その意味でも、真実に目を閉じていてはならないと思う。見極めていこうとする努力を大事にしたい。

空白のアルバム 父の苦しさを想う

父は生きていれば96才。アルバムを繰ると空白の頁がある。父の青年時代、戦中時と重なる。その時の写真を封印してしまつた父の心中とは。温厚な父は争いごとが大嫌いだつた。戦争時代の自分を思い出し、残すことを避けた父の心痛を想う。法案内容が、戦争は「殺し合うこと」、喧嘩に例えられるのは筋違いも甚だしい。掛け替えないその人の人生が「思い出」として残るような社会でなければならぬ。

身勝手な政治 このち育む営み問われる

何故法案に執着するのか本常に疑問。18才選挙権の問

題でも、右傾化を煽り、若者の風潮を「作って」自分たちに利しようとする安易で身勝手な底意。若者のなかには戦争法案反対の声が広がっていることも事実。子どものいのちや健康、成長を育むという教育の営みが問われる。

「ああ、遅かつた」 そうならなごもつて

「戦争有事の際は、障害者が『選別』される」これは歴史の教訓。認められない。自衛隊は攻めるのではなく守るものというのが一般的な理解。それがひっくり返され、戦争を仕掛ける方になる。その時になって「ああ、遅かつた」とならないよう、今なんとかしなければと思う。

「戦争」感じる子ども 異常な社会に危機感

学校や家庭で、子どもが「戦争行くの?」と聞いてくることと自体もう普通ではない。それほど進行していることが異



発言する参加者

常だと感じる。家にも息子がいるので、やはり他人事ではない。このままいったら本当に大変なことになるのではと危機感が押し寄せる。「若い人達の行動調査」によれば日本の幸せランキングは43位。こういうデータからも日本は危ういと思う。

子ども取り巻く環境 考える力育みたい

小学生の息子が、「戦争あるの?」と聞いてくる。自衛隊基地の見学会に行つてきたというクラスの子が、「すごかつたよ、ドンパツやつて」などと言う。あどけない感興と放つておくこともできるが、こんな事態が進行している中では無視できない。その子の話を聴き取りながら、いのちのことや生きることの意味などについて、その子自身が考え、その子なりに判断できるようにとの願いを込めて話し合つた。考えていく力を育むことが大事だと思う。

戦争行く順番考える子 「徴兵」過ぎり、不安

受け持ちの子の兄は高卒後の進路を決める時期に。家で



発言する参加者

も話題に。その子が「戦争行く順番は?」と問いかけ、「最初に自衛隊でしょ、次が警察官で、その次が消防士で...」と言う。周囲で話題になっていくことをその子なりの心で受け止めているらうと感じた。その子と語り合つていくとき、ふと徴兵制のことが過ぎつた。すでに将来の「戦力補充」の策を考えているのかもしれないという不安に駆られ、今断念させなければと思った。

の米「鍵」 けんもつとつて

首相は、「法案が整備されれば」これでちゃんと鍵がかつた家になる」と例えるが、憲法9条こそ平和を守る「鍵」。こういう時こそ、子どもといつしよに考えていかなければならないと思う。

自衛権は認めるが 米の従属下ではダメ

ニュースを見る度にストレスが溜まる。時折報道で聞く「ママさんの声」は、新鮮だが、一方で今の政治の危うさ

を映していると思う。自分は元来、国を守る自衛権は自然権の一つとして必要と考え、真実独立している状態であれば、自衛隊は持つべきという持論を有している。だが、今のようアメリカの従属下にある状態では、法案は絶対に認められない。異見、異論も聞きたい。

時代の風を受けて 子どもたちを育つ

小学校卒業を控えた時の風景を思い出す。何故か私は、東大の安田講堂を描いていた。ベトナム戦争への反対運動が盛り上がつていたころのこと、反戦運動の象徴が、学生運動の拠点だった東大そして安田講堂だった。テレビの画面から映し出される、学生たちの渦のような姿が焼き付いている。幼かつた自分も、時の社会を包んでいた風を受けてきたこと痛感する。いつの時代も、子どもたちはその時代の空気を吸いながら育つという。禍根を残さぬよう、今を生きている子どもたちとともにいたい。



発言する参加者